出雲大社の慶長度造営本殿について

RECONSTRUCTION OF THE MAIN SANCTUARY AT IZUMO-TAISHA SHRINE IN THE KEICHO PERIOD

藤 沢 彰*
Akira FUJISAWA

I propose a reconstructed model of the main sanctuary at *Izumo-Taisha Shrine* in the *Keicho* period. It was *5 ken* (35 *shaku*, approximately 10.605 meters) wide, *5 ken* deep, a *ken* was equivalent to 7 *shaku*, and 6 *jo 5 shaku 4 sun* (approximately 19.816 meters) high. I presume that it didn't have a pillar that supports the ridge beam directly (*munamoti-bashira*), and it had a roof construction system based on one slightly curved beam (*koryo*) and principal rafter with king-strut (*inoko-sasu*).

keywords: *Izumo-Taisha Shrine, Shinto-shrine, main sanctuary, Keicho period, reconstruction,*
出雲大社、神社、本殿、慶長年間、復元

はじめに

豊臣秀頼の造営した出雲大社の慶長度本殿については、先学がすでにいくつかの重要な点を指摘している。また、近年では三浦正幸・福本健司の両氏が復元図を作成し、はじめて慶長度本殿の具体的な姿を提示した¹⁾。筆者も「古代出雲文化展」出品のための復元模型制作に参画する機会を得、復元を試みた²⁾。結果としてそれは三浦・福本両氏の復元案とは異なるものとなった。本稿では、拙案に用いた史料を提示し史料批判をくわえながらその解釈を示し、あわせて推測部分をふくめ、拙案作成にいたる考察経過を述べることにする。

1. 先行研究

まず、先行研究における慶長度本殿についての具体的な指摘をまとめ、問題点を明らかにしておく。なお、重複するものは原則として省略する。

福山敏男氏は「慶長十四年度造営の記録」、『懐橘談』などをよりどころとして下記のような指摘をした³⁾。

規模・部材寸法 棟高5丈7尺4寸／桁行梁間とも5間(30尺、1間を6尺に設定)／四周の縁は正面1丈、側面背面8尺／床高1丈3尺4寸／天井高(畳より)1丈1尺1寸／心柱の径2尺6寸／向拝柱1尺1寸角／上段の高さ7寸
構造形式 礎石立／桧皮葺／内部に上段下段あり／天井あり／畳敷／四周に縁あり／階隠あり

装飾・彩色 要所に飾金物／天井に八雲の彩画／柱9本は丹青にて彩る／内部に金彩色の当社地図、競馬の絵をかく

以上の指摘のなかで問題と思われるのは、平面規模である。複数の史料に桁行梁間とも5間という記述はみられるが、1間をいくらに設定するかについては論拠を示さず1間を6尺としている。

川上貢氏は、慶長度の次の造替にあたる寛文度の造営記録「御造営日記」(史料については2.5項参照)を分析し、構造形式について以下の点を指摘した⁴⁾。

構造形式 組物は出組／床下は羽目板張り／大梁上に束柱をたて、二重梁を組んで中間の母屋を支える方法は寛文度から採用された(したがって慶長度は束柱を用い二重梁を支える架構ではなかった)〔()内は筆者〕

出組の採用と小屋構造の指摘は、復元設計にとって重要な意味をもつ。

稲垣栄三氏は「杵築大社只今御座候仮殿造御宮立間尺覚」(史料については2.3項参照)によって、かなり詳しい規模・部材寸法と装飾・彩色などについて明らかにした⁵⁾。

規模・部材寸法 平面は5間四方／礎石から箱棟までの高さ5丈7尺4寸／千木までの高さ6丈5尺4寸／四周の縁は正面1丈、側面背面8尺／心柱の径2尺5寸／側柱の径2尺2寸5分／桧皮軒厚さ2尺

構造形式 礎石／桧皮葺／箱棟／天井あり／四周に縁あり／階

* 京都大学大学院工学研究科 助手・工博

Research Assoc., Graduate School of Eng., Kyoto Univ., Dr. Eng.

隠あり／階段15級

装飾・彩色 内部の柱は朱塗り、外部の柱は黒漆真塗り／天井に八雲の彩画をかく／切妻破風に彫刻を施した金物あり

さらに、稲垣氏は福山氏の研究を引用して床高は1丈3尺4寸、天井高は1丈1尺1寸であり、床の高さが天井の高さより2尺あまり高いことを指摘し、「高床らしさを示すのは全体の高さなのではなく、むしろ地上より床までの高さが床上の高さよりも高く造られていること、それによって建物の姿が軽快にみえることでなければならない」とし、「慶長の本殿は細部に新しい試みを施しながら、全体としてはかろうじて伝統的な比例を失わなかったといえよう」と結論した。

三浦・福本両氏は基本的な規模・形式は稲垣氏の紹介した「杵築大社只今御座候仮殿造御宮立間尺覚」に依拠し、新出史料に検討をくわえ以下の点を指摘した⁶⁾。

規模 平面5間(32尺5寸)四方(1間を京間6尺5寸に設定)

構造形式 組物は出組／妻面は棟持柱を用いず二重虹梁大瓶束／二軒／刳柱を用いる

装飾・彩色 垂木鼻に八双型の飾金具を打つ／両妻壁に龍二匹(長さ4間)と雲水の彫物を飾る／階隠に蓑股を飾る／柱、長押、敷居に布着せして、内側は朱塗り、外側は黒漆塗り

ここで問題になるのは、1間を京間6尺5寸に設定し、平面規模を32尺5寸四方としたこと、妻面を二重虹梁大瓶束としたこと、である。そして、慶長度本殿について次のように結論した。①慶長度本殿は古式の大社造とは全く異なり、大社造とは言いがたいほどである。②寛文造営の初期の段階で幕府の提示した計画案(以下、寛文度幕府案)【図1】⁷⁾は、慶長度本殿の意匠を濃厚に引き継いでいる。③現本殿(延享度造営)の妻飾は、慶長度本殿の二重虹梁大瓶束のなごりである。④現本殿は慶長度本殿をもととして、寛文度造営の際に江戸幕府の工匠による復元考察の結果である。

ここで示された慶長度本殿および現本殿の位置付けに、筆者は異なる見解をもっているが、拙案を提示したあとに述べることにする。

2. 復元史料

次に復元の基礎となった主な史料を紹介する。

2.1 「杵築大社近郷絵図」(【図2】部分)

北島家所蔵であり、おもてに「慶長十四年御造営之図」とある。よく似た図柄の絵図が千家家にも伝わり、「寛永御絵図」と呼ばれている⁸⁾。

北島・千家両家に伝わる絵図は、三重塔⁹⁾・鐘楼・一切経堂などを描いて出雲大社の神仏習合の状況を伝え、従来、慶長造営当時の景観を示すと考えられてきた。しかし、最近の千家和比古氏の研究¹⁰⁾により、両絵図とも寛文度造営が本格化する寛文4年(1661)10月に、造替以前の状況を記録するため、松江住の絵師狩野(西山)久三郎に命じ下絵を作成し、のちに清画したものであることが明らかになった。描写内容は寛文4年当時の実景とは言いきれず、神仏習合の状況を記録するための復元的描写をも含み、いっぽうで復元描写されなかった建物も混在する絵図であることが指摘された。

慶長度本殿、およびほかの社殿を含めた境内を復元するにあたっては、考察の余地を多分にのこす絵図ではあるが、当時の状況を視覚的に伝えるものはほかになく、基礎史料とした¹¹⁾。

【図1】出雲大社之図(寛文度幕府案)『古図にみる日本の建築』より

【図2】杵築大社近郷絵図(部分)

2.2 「慶長造営御宮立間尺〈佐草〉自清控」〔【史料1】〕

正保3年(1646)11月1日の年紀があり、出雲大社が所蔵する。後述するように、佐草自清は北島国造家の上官で、寛文度造営では幕府との折衝、造営計画の立案・遂行などにおいて中心的役割を果たし、寛文度造営の記録「御造営日記」(2.5項参照)を残した。現在伝わるものは、出雲大社職員であった矢田豊雄氏が筆写したもので、自清の控自体は所在不明である。今回の復元にあって、はじめて千家氏によって紹介され、詳細な史料批判がくわえられた¹²⁾。それによれば、原文の写し間違えなどがあるかもしれないが、次項で紹介する「杵築大社只今御座候仮殿造御宮立間尺覚」と対照してもおおきな矛盾はなく、ほぼ信頼して良いものである、と結論された。従来知られていたこの種の慶長度社殿に関する記録より数段詳しい記述があり、今回の復元では最重要史料となった。

建物によって情報に精粗の差があるが、当時存在した本殿をはじめとする諸社殿の規模・部材寸法を記し、また、慶長13年(1608)までであったが、その後退転した社殿の記録もある。末尾に「右の通りなれ共、今度、国守松平出羽守殿、御改被成候帳之写」「奉行 落合彦左衛門尉／大工頭 竹内右兵衛尉／画工 大田弥兵衛尉」「正保三年丙戌霜月一日」とある。正保3年は慶長度社殿の建て直しを幕府に申し出た最初の年であった¹³⁾。次に、本殿にかかわる部分のみ摘記する。

一、左記正保三丙戌霜月記ニ云フ

- 一、本社うちのり五間四方、但し京間ニ五寸
- 一、志ん柱さし渡し二尺六寸
- 一、がはの柱さし渡し二尺式寸五分
- 一、天井高さ畳より一丈一尺一寸
- 一、上段ノ高さ七寸
- 一、石よりゆかまで高サ一丈三尺四寸
- 一、ゆかより貫^{ツツ}ノけた迄一丈七尺
- 一、のきノけたより箱棟まで二丈七尺
- 一、三口^{（左力）}ノ五丈七尺四寸^{（後力）}
- 一、えんの廣さ 兩脇^{（後力）}渡ハ八尺宛、前ハ一丈
- 一、柱口より軒口迄一丈四尺
- 一、軒のあつさ二尺
- 一、むねの長九間
- 一、きさ階〈よこ式間半、長さ三間〉但、きさはし数十五
- 一、ごはいノはしら一尺一寸四方

（〈〉内は割り書き、以下おなじ）

2.3 「杵築大社只今御座候仮殿造御宮立間尺覚」〔【史料2】〕

すでに述べたように、稲垣、三浦、福本各氏が用いた史料であり¹⁴⁾、慶長度本殿に関する記録である。内容は【史料1】とほとんど矛盾しない。ただ、志ん柱(心柱)の径が【史料1】では2尺6寸、【史料2】では2尺5寸となっている。次に、本殿にかかわる部分のみ摘記する。

- 一本社内のり五間四方
- 一柱九本〈心柱さし渡し式尺五寸
- 一かの柱さし渡し式尺式寸五歩〉
- 一内ハ朱外ハ黒漆真塗
- 一縁ノ広サ〈兩脇後ハ八尺宛ノ前ハ七丈〉
- 一石口より箱棟迄高サ五丈七尺四寸
- 一千木迄ノ高サ六丈五尺四寸
- 一棟ノ長サ九間
- 一檜皮葺軒ノ厚サ式尺
- 一二重垂木さかわ金物
- 一切妻破風板大金物彫物〈龍二疋つれノ雲水彩色〉
- 一はしかくし〈横式間半長サ三間檜皮葺きさはしの数
- 一十五らんかんぎほうし金物臺俣ほり物〉
- 一内殿天井絵八雲七つ極彩色
- 一こみはりつけ金〈絵極彩色〉

2.4 「口上之覚」(仮称)〔【史料3】〕

寛文度造営の準備中である寛文2年(1662)6月16日付、佐草宮内(自清)、嶋市丞(千家国造家上官)連名、奉行所あて書状の控えて、一部に慶長度本殿に関する記述がある。先に三浦氏が用いた史料であるが、三浦氏は島根県立図書館蔵謄写本¹⁵⁾によっている。ここでは千家家所蔵本¹⁶⁾を紹介する。

仮殿造之宮ニ而御座候得共〈五間四方高サノ六丈五尺四寸〉柱長押敷居〈布きせ内は朱ノ外は黒塗〉彫物〈南破風ニ龍ノ二疋連長サノ四間宛大工ハ其節京都之ノ良匠茶木久左衛門仕候〉組物絵〈内殿金ノ張付ノ極彩色〉金物此外末社等庇之

2.5 「御造営日記」

北島国造家の上官、佐草自清が記した寛文度造営の記録で、佐草平安氏が所蔵する¹⁷⁾。寛文度造営における、幕府との折衝、資金・

用材の確保から社殿の形式決定までの各種打ち合わせ、造営経過が詳細に記されている。寛文度本殿の形式決定の過程で比較参照した慶長度本殿に関する記述もみられる。論述をすすめる都合上、ここで「御造営日記」を一括して紹介するのではなく、以下必要に応じ適宜引用することにする。

3. 規模と部材寸法について

本殿の規模と部材寸法は「慶長造営御宮立間尺〈佐草〉自清控」【史料1】と「杵築大社只今御座候仮殿造御宮立間尺覚」【史料2】によってかなり明らかになる。

柱間を桁行梁行とも5間とすることは諸史料に一致する。最大の問題点は平面規模において、1間をいくらに設定するかであろう。福山氏は1間を6尺とし、30尺四方とした。福山氏の用いた寸法を記した各種史料に1間を6尺にする根拠は記されていない。ただ、「御造営日記」の寛文元年11月14日条に、「京間六尺五寸ハ中古よりの事也、昔ハ六尺一間也」とある。また、京間の採用に関しては、『匠明』所載の天正度本殿の指図に「京間五間四方有」と書き込みがある¹⁸⁾。しかし、他にそれより以前のこととして1間=6尺を謳った史料は見当たらない。

福本氏は京間の1間=6尺5寸を採用し、32尺5寸四方とした。その理由として、慶長度本殿が豊臣秀頼の造営であり秀頼の工匠が京・大阪の大工であること、毛利輝元の造営した天正度本殿(京間五間四方)より秀頼の造営した慶長度本殿が小さくなるとは考えにくいこと、をあげた。

さて、ここで注目されるのは【史料1】の「本社うちのり五間四方、但し京間ニ五寸」という記述である。これは、平面の基準になる1間の長さを京間6尺5寸に5寸を加え、7尺にすると解釈できる。したがって平面は35尺四方ということになる。

1間=7尺を示す史料は他に見当たらないが、「御造営日記」寛文4年閏5月23日条に寛文度造営の庁屋の設計を見直す記事があり、庁屋九柱さし渡し一尺二寸ハ七尺間、十五間ノ差図、去年六尺五寸ニ仕替申二付、柱ふとく見苦ニ付、さし渡し九寸ニ義定仕候

と記す。これによれば、寛文度庁屋は初め1間=7尺で設計され、のちに6尺5寸に変更されたという。当初の7尺間は慶長度造営の影響ではなかろうか。

【史料1】【史料2】をもとに、規模と部材寸法をまとめると以下ようになる(ただし、心柱径は【史料1】を採用)。

規模・部材寸法

- ・桁行梁行 5間四方(35尺四方、1間=7尺)ノ縁の広さ 正面1丈、側面背面8尺ノ軒の出 1丈4尺ノ軒の厚さ 2尺ノ棟の長さ 9間(63尺)ノ階 15級 横2.5間(17.5尺) 長さ3間(21尺)
- ・礎石より床までの高さ 1丈3尺4寸ノ床より軒桁までの高さ 1丈7尺ノ軒桁より箱棟までの高さ 2丈7尺ノ礎石より箱棟までの高さ 5丈7尺4寸ノ礎石より千木までの高さ 6丈5尺4寸ノ天井高(畳より)1丈1尺1寸ノ上段の高さ 7寸
- ・心柱径 2尺6寸ノ側柱径 2尺2寸5分ノ向拝柱 1尺1寸角

4. 構造形式について

すでに指摘されていることだが、「御造営日記」寛文4年閏5月

24日条、同7月13日条によれば、慶長度本殿には礎石を用い、床下は羽目板張り、階隠が存在した。また、それらの採用は慶長度からのことであり、「万事慶長ノ社より古法を背候事」(寛文4年間5月24日条)とある。

・「御造営日記」寛文4年(1664)閏5月24日条

白日 昨日御本社を始庁屋等の地割差図吟味被成旨国造殿へ佐草長谷披露、就夫御本社御床の下天正八年仮殿造営の社迄ハ如古法あけはなしニて有之候、慶長御造営より御宮造華美ニ罷成、御床の下迄はめ板在之候、(中略)当社も天正御宮造迄ハ礎ニて無之候、万事慶長ノ社より古法を背候事、

・「御造営日記」寛文4年7月13日条

御本社の本形今日迄ニ調、末代の手本ニ仕永御宮立の様子見せ可申ため四方のはめ板又は階かくしも不仕候、御本社ニ階かくし仕候事慶長御造営の宮より始り申候、

慶長度に礎石立を採用したいきさつについては、「出雲国造系譜考」¹⁹⁾第四十二世国造国経臣の項に、

後陽成院ノ御宇慶長十四年宮作之時、両国造有リ評議、於テ神前ニ令御占任セ²⁰⁾ニ、始メテ而為ス礎ト矣

とあり、神前において御占の²⁰⁾をとって採否を決定したという。

本殿形式に新手法が導入されたのは慶長度からであり、寛文度造営ではそれらを古式に戻すかが検討されている。しかし、上記の礎石・羽目板・階隠の3点は、構造上の合理性、使い勝手の上から評価されたようで、いずれも否定されず、寛文度でも踏襲された。ここで重要なことは、大社側の寛文度本殿の設計過程においては、慶長度本殿がたたき台となり、何かと比較されていることである。

構造形式の点でなによりも問題となるのは組物と妻飾である。

三浦氏は「出雲国造系譜考」によって慶長度本殿の組物は出組であることを論証した²⁰⁾。

「御造営日記」寛文元年11月14日条に寛文造営最初期の大社宮大工と幕府作事方被官大工鈴木三郎左衛門の打ち合わせの記事があり、宮両大工鈴木三郎左衛門へ参ル、大社御宮立組物定て出組ニて可有之候、二手先ハ有間敷と申候と記す。大社の組物は出組であるべきで、二手先は受け入れられないとの大社側宮大工の意向が記されている。これに対して鈴木三郎左衛門は「二手先も日本様ニ地割可仕」と述べ、二手先を検討することを提案し、事実、後日示される幕府案〔図1〕では二手先が採用されている。寛文ころの大社宮大工には「大社本殿の組物は出組」という認識があったようである。

本殿の組物が出組となると、大社造の特徴である壁面から突出した棟持柱は用いることが困難になり、妻面の構成は現本殿〔延享元年(1744)〕や神魂神社本殿〔天正11年(1583)〕とは異なってくる。

三浦・福本案では妻飾に二重虹梁大瓶束を用いている。その理由として、「宇豆柱が棟持柱とならないこと、寛文度本殿計画案(寛文度幕府案)において二重虹梁大瓶束が用いられていること、同時期の他の豊臣秀頼造営による神社本殿にも二重虹梁がつかわれていること」〔()内は筆者〕をあげている²¹⁾。

しかし、妻を二重虹梁大瓶束とすることには問題がある。

寛文度造営では寛文2年2月に幕府案の基本設計が蹺い、2月29日に地割繪書と惣差図を江戸において大社側に一覽させている²²⁾。その後、4月5日に幕府は寛文度造営に対する基本方針9カ条を提

示する。幕府の方針のうち、大社にとって抜き差しならない重大な問題点は、新造は本殿だけであり他の社殿は修復にとどめるということであった。これに対して、大社側は本殿の造替だけにとどめるのではなく、全社殿の新造、境内全域の拡張整備を重ねて陳情し、結果的に幕府の合意を取り付けることに成功している。

方針の転換とともに幕府の提示した本殿の基本設計も大きく見直され、最終的には幕府案とは全く異なる寛文度本殿が造営された。その設計見直しの過程で、先述したようにしばしば慶長度本殿が引き合いに出されているのである。

寛文度本殿の基本設計の見直しは、寛文4年閏5月から本格化する。「すて柱」(壁から離れて立つ棟持柱)の採用も検討されており、「御造営日記」寛文4年閏5月24日条に、

此度御正殿造大そう成屋ねニて候故、棟木兩ノ桁ニ内外宮のこくとすて柱可仕哉、又ハ臂木ニて能候ハんやと半右殿佐草など吟味仕、勿論すて柱不苦事ニ候へ共、御柱九本ニ定り在之上ハ、不入物か

とあって、棟木と両桁に肘木を入れるだけで良いのか、あるいは(伊勢)内外宮のように棟持柱を用いて構造を強化するべきか、との議論がもちあがり、結局、柱は九本と決まっているので、見合わせることに落ち着いている。設計が見直され、決定して行く過程で、組物、妻面の構成については、つづけて閏5月24日条に、

臂木ハ棟木兩桁先はかりニ仕候ハ見懸もつよミも能候ハんと、大工茂左衛門佐草相談の趣、半右殿へ相談儀定仕候、本形ニて様子かつてん被申候、

とあり、この時点の計画では、肘木を棟木と両桁に入れるだけの簡潔なものであったことがわかる。「大工茂左衛門」は同月19日に到着したばかりの江戸大工松井茂左衛門であり、「佐草」は佐草宮内、「半右殿」は松江藩造営奉行岡田半右衛門である。また、指図だけではなく本形(模型)を用いて検討が加えられていることも注目され、最終的に本形は7月13日に完成し、将来の手本とされた²³⁾。

検討はさらにつづき、6月16日条に、

同日御本社本形いかにも堅メつよく被仕候ニしかし左候へ共、梁ヲ左右の桁ばかりニてつなき候てハよハミたるへきと為候間中桁ニ通り入、又其二つか柱ヲ立候て小屋梁ニ取付候ハハ可然候ハん哉と佐草差図申候へは、大工庄助いかにも尤と候て中桁右の差図ノ通り仕候、末代残シ置本形の事ニ候間随分被入念候へと申渡し候

とある。梁を左右の桁につないただけでは弱いので、中桁を入れ束柱をたて、小屋梁に取り付けることを佐草宮内が提案し、大工庄助(江戸大工日向少助)も同意している。

これにより、寛文本殿の妻構成の基本である、大梁上に束柱をたて二重梁を組んで、中間の母屋桁を支え、肘木を棟木・母屋桁・軒桁の下に挿入する形式が成立した(実際には肘木部材は直線材になっている)。また、この構成は、構造的に寛文度幕府案の二重虹梁大瓶束の手法に通じ、かつて、これを江戸において一覽したことのある佐草宮内が提案していることは注目される。

この妻構造の設計変更の過程、すなわち、梁を桁にわたし肘木を棟木と両桁の下に入れるだけの簡潔な形式から、大梁上に束柱をたて二重梁を組んで、中間の母屋桁を支え、肘木を棟木・母屋桁・軒桁の下に挿入する形式への変化は、大社側の基本設計見直しの素案

【図3】出雲大社 慶長度本殿 復元図(正面)

【写真1】出雲大社 慶長度本殿 復元模型(正面 1/150)

【写真2】出雲大社 慶長度本殿 復元模型(側面 1/150)

に、寛文度幕府案があったのではないことを示唆している。つまり、簡潔な構造から寛文度幕府案に通じる複雑な構造への設計変更は、最初から複雑な構造が素案にあったのではなく、数度の検討の結果、かつてそれを見たことのある佐草宮内によって、寛文度幕府案の妻構造に近いものが提案され採用されたことをものがたっている。また、寛文度本殿の基本設計案は、幕府の工匠中心ではなく、大社側が主導権を握りながら検討が重ねられ、提案がくりかえされ決定されている。大社側の素案は寛文度幕府案ではなく、当時存在していた慶長度本殿と考えるべきであり、したがって、慶長度本殿の妻面はかなり簡潔な架構であったと推測される。よって、大梁・束柱・二重梁・母屋桁の妻構成は寛文度からの新儀であり、慶長度本殿は

別の形式であったと考えられる²⁴⁾。

しかし、以上の考察だけで慶長度本殿の妻面の形式を確定することはできない。出組の採用、宇豆柱は棟持柱とならない、そして、大梁・束柱・二重梁・母屋桁の妻構成とはならない、という点を基に、あとは「杵築大社近郷絵図」【図2】の描写を参考に推測するしか方法はない。

【図2】では、本殿妻面の中央に大梁から棟木までのびる垂直線がはっきりと見てとれ、梁は二重梁ではなく大梁一本だけで、組物は見えない。組物は描写が省略されたと考えられても、妻中央の垂直線を棟持柱と解釈するわけには行かない。文献史料と絵画史料が相互に矛盾することになり判断に苦しむが、復元では、妻面の構成を出組・虹梁・豕扱首とした²⁵⁾。二重虹梁大瓶束として、妻中央の垂直線が存在と一重梁であることに目をつぶるのは、慶長度社殿の状況を視覚的に伝える唯一の絵画史料を軽視することになる。

構造形式についてまとめると以下ようになる。

構造形式

礎石立／桧皮葺／箱棟／千木／内部に上段下段あり／天井あり／畳敷／四周に縁あり／階隠あり／床下は羽目板張り／組物は出組／宇豆柱は棟持柱としない／妻は虹梁、豕扱首／二軒／柱は矧柱を用いる

4. 装飾と彩色

装飾と彩色については、妻に飾る龍の彫物が問題になる。

「口上之覚」【史料3】(千家家所蔵本)に、

彫物〈南破風二龍／二疋連長サ／四間宛大工ハ其節京都之良匠茶木久左衛門仕候〉

とあって、南破風(南妻面)に龍が二匹飾られていたという。ところが島根県立図書館所蔵謄写本には「彫物〈両破風二龍／二疋連…〉」とあって、龍は両面の妻に飾られていたことになる。千家家本と図書館本の信頼性については註16に述べた。「南」と「両」の一字の相違だけではなんとも言いがたいが、復元では千家家本にしたがい、南妻面だけに龍の彫物を飾った²⁶⁾。

装飾と彩色についてまとめると以下ようになる。

装飾・彩色

要所に飾金物あり／天井に八雲の彩画をかく／内部に金彩色の当社地図、競馬の絵をかく／柱、長押、敷居に布着せして、内側は朱塗り、外側は黒漆塗り／切妻破風に彫刻を施した金物あり／南妻面に龍二匹と雲水の彫物を飾る／階隠に墓股を飾る

むすび

以上の考察をもとに復元した出雲大社の慶長度本殿は【図3】

【写真1】【写真2】のようになる(ただし、内部および細部は復元していない)。

最後に、本論文の範囲を越える点もあるが、慶長度本殿、寛文度幕府案、寛文度本殿(延享度現本殿にも通じる)の位置付けについて私見を述べてむすびとする。

①慶長度本殿は、礎石・床下の羽目板・階隠などの新規採用、出組の採用、宇豆柱を棟持柱としない、彩色、妻の龍の彫物など、古式の大社本殿に見られない構造形式と、かなり強い装飾性が指摘できる。

- ②寛文度幕府案〔図1〕は規模・構造形式・意匠の面で慶長度本殿を引き継いでいない²⁷⁾。寛文度幕府案に関しては、むしろ寛永21年(1644)造営の日御碕神社社殿(鎌川郡大社町)との関連が想定される²⁸⁾。
- ③寛文度本殿は、幕府・松江藩・出雲大社の造営担当者、江戸・京都・松江・杵築の職人の協力のもとに実現したが²⁹⁾、そのたたき台となったのは慶長度本殿と考えられ、基本設計の見直し、決定の過程で主導的役割を果たしたのは松江藩・出雲大社の造営担当者である。
- ④寛文度本殿(延享度現本殿)の妻構造は、基本設計見直しの過程で、寛文度幕府案に影響されて新たに導入されたものである。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、千家和比古(出雲大社)・和田嘉宥(米子工業高等専門学校)・島根県教育委員会・島根県古代文化センターの方々に数多くの史料を提供していただき、また、貴重な御教示を賜りました。ここに記して謝意を表します。

注

- 三浦正幸「出雲大社慶長度本殿の復元史料―出雲大社本殿の復元研究(其一)―」、福本健司「出雲大社慶長度本殿の復元考察―出雲大社本殿の復元研究(其二)―」(ともに『日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)建築歴史・意匠』1996年)。それぞれ著者名は単記になっているが、ここでは一連の共同研究として扱い復元は共同案とさせていただく。
- 「古代出雲文化展」東京展 97年4月26日～6月8日 於東武美術館・島根展 97年7月5日～8月24日 於島根県立八雲立つ風土記の丘資料館・島根県立博物館・大阪展 97年11月18日～12月21日 於大阪市立美術館。平安時代中期の本殿模型(1/150)、鎌倉時代前期(室治頃)・江戸時代前期(慶長頃)・江戸時代中期(寛文頃)の境内建築模型(いずれも1/150)を作成した。監修 千家和比古(出雲大社)・和田嘉宥(米子工業高等専門学校)・島根県教育委員会、設計協力 富島義幸(京都大学大学院)。ただし、平安時代中期の本殿模型は、監修 福山敏男、大林組復元設計による。
- 福山敏男「出雲大社の金輪造営図」、「神社建築―大社造復元試論―」、「山陰の神社建築」(以上、『神社建築の研究』福山敏男著作集四 中央公論美術出版 1984)、同「出雲大社の社殿」(『日本建築史研究』墨水管房改訂版 1972)など。なお、「慶長十四年度造営の記録」(「神社建築―大社造復元試論―」)が、具体的にどの史料をさしているのかは明らかでない。また、「正保三年の杵築大社只今在之御宮之間尺覚は慶長十四年度造営の社殿について記したものである。」(「出雲大社の社殿」とあり、内容の一部を紹介している。後述する「慶長造営御宮立間尺(佐草)自清控」(『史料1』)とは表題が異なっており、別史料と思われるが、内容は矛盾しない。
- 川上貢「出雲大社の建築」(上田正昭編『出雲の神々』筑摩書房 1987)。
- 稲垣栄三「神の常住する社―伊勢神宮と出雲大社―」(伊藤ていじ・井上靖・鈴木嘉吉編『伊勢神宮・出雲大社』日本名建築写真選集 第14巻 新潮社 1993)。
- 三浦・福本前掲論文。
- 「出雲大社図」一巻〔元禄15年(1702) 甲良宗貞写 東京国立博物館所蔵、国立歴史民俗博物館蔵『古図にみる日本の建築』至文堂 1989 所収)が、寛文度幕府案と考えられる。同図は「幕府作草方の甲良宗貞が元禄15年に「修理」が持っていた図を縮小して写したもの」(『古図にみる日本の建築』図版解説、濱島正士執筆)であり、また、「(寛文度造営)初期の段階で、大社側の原案にもとづいて幕府が作成したと推定され」「幕府作草方では地割(平面、立面、断面の設計)を大工頭鈴木修理が、木割(部材寸法、各部比例の設計)を木原内匠が分担し、寛文二年二月二十九日、地割滑合ならびに惣差図が完成しており、大社側に一覧させている」(川上前掲論文)。「御造営日記」(本文2.5項参照)寛文2年2月14日条、同2月29日条、同3月6日条などに関連記事がある。
- 千家和比古「出雲大社の、いわゆる神仏習合を伝える絵図の検討」(『古代文化研究』第4号 島根県古代文化センター 1996 所収)によれば、裏面

- に「寛永御□□(絵図カ)」の貼り紙がある。なお、「寛永御絵図」の由来、北島家所蔵「慶長十四年御造営之図」との異同については、同論文に詳しい考察がある。
- 名草神社三重塔(兵庫県養父郡八鹿町石原 大永7年(1527)建立 寛文5年(1665)移築修理 重文)として現存する。同塔は寛文造営時に但馬国妙見山日光院より本殿用材を入手したのと交換に譲渡された。絵図に描かれた建築のうち唯一現存する。
 - 千家前掲論文。
 - 文献によって存在が推定されるが、絵図に見えないものは原則として復元しなかった。
 - 千家前掲論文による。同論文に全文を翻刻し、掲載する。
 - 正保3年6月17日付「阿部忠秋啓状」(『出雲国造家文書』所収)。和田嘉宥「寛文度出雲大社造営について―大社造営一紙目録を中心に―」(『日本建築学会中国支部研究報告集』平成8年度)による。なお、同論文では寛文度造営の造営経緯、詳細な経費の分析などが行われている。
 - 稲垣、三浦、福本各氏は島根県立図書館所蔵、影写本、「千家家文書」によっている。千家家所蔵の原本の表題は「杵築大社只今御座候仮段造御宮立間尺覚」であり、県立図書館本に見られる「雲州」の語はない。
 - 「鎌川郡杵築町佐草千尋蔵文書」史籍記録第二五六七号、島根県立図書館所蔵、影写本。末尾に朱書きで、「大正二年十月十八日、鎌川郡杵築町佐草千尋蔵原本ニヨリ船写ス」とある。
 - 「口上之覚」原本は幕府神社奉行所へ提出され、その控が佐草千尋家に伝わった。控の写本が千家家本であり(写本作成時期不明)、控の影写本が註15の図書館本(大正2年作成)である。佐草千尋家本は後年所在不明。両者を比較すると、図書館本には、脱漏、誤訳があり、意味の通じかねる箇所が見られる。本殿に関する引用部分では次のような異同がある。(千家家本)「柱長押敷居(布きせ、内は朱、外は黒塗)」→(図書館本)「柱長押敷居(外ハ布きせ、内ハ朱黒塗)」。(千家家本)「彫物(南破風ニ龍二疋連)」→(図書館本)「彫物(南破風ニ龍二疋連)」。柱長押敷居の記述では、図書館本は意味が通じず誤写と思われる。彫物の記述では、(千家家本)「南破風」と(図書館本)「南破風」の異同があるが、ここでは千家家本にしたがった。島根県立古代文化センター岡宏三氏の御教示による。
 - 寛文元年8月より同3年12月までは写本一冊が現存。寛文4年正月より同4年5月5日まで一冊、寛文4年5月6日より同6月11日まで一冊、寛文4年6月12日より同4年9月10日まで一冊、寛文5年7月15日より同5年8月26日まで一冊、計四冊は佐草自清自筆の原本が現存する。これらは島根県大社町大社町史編纂委員会がマイクロフィルム撮影し、『名草神社三重塔と出雲大社』(山田宗之ほか、私家版、1995)に翻刻されている。
 - 『匠明』『社記集』所収。同図舞殿の規模の書き入れから、天正度本殿の指図と判明する(前掲福山「出雲大社の社殿」)。
 - 佐草自清著 貞享3年(1686)、『神道大系』神社廻37 出雲大社 所収。
 - 三浦前掲論文による。なお、「出雲国造系譜考」は慶長度本殿について、「蓋慶長年中仮段造営之時(中略)且又御本殿出組造二重垂木彫物等、皆以非古制也、雖仮段造為後戒委注之矣」と記す。
 - 福本前掲論文。
 - 「御造営日記」寛文2年2月29日条。註7参照。
 - 「御造営日記」寛文4年7月13日条(本文前掲)。木形は現存し、出雲大社神祐殿に展示されている。
 - 寛文度本殿の小屋檜造(妻面の檜成)が寛文度からの新儀であることは、すでに川上前掲論文に指摘されており、本稿の論点も同論文によるところが大きい。
 - 「杵築大社近郷絵図」〔図1〕に投首棹は見られない。投首棹が無かった可能性もあるが、投首棹を入れたのは、虹梁に棟束だけでは、鉛造的にかなり弱いと思われること、仏教建築の影響を濃厚に示す慶長度本殿には投首棹を入れた方がふさわしいと思われること、による。
 - この竜の彫物は寛文度造営にあたって拝殿の妻に転用され、昭和28年(1953)に焼失するまで存在した。旧拝殿妻および龍彫物の写真は、『古代出雲文化展 サイエンスロマン “IZUMO” ―古代出雲文化展への招待―』(島根県立八雲立つ風土記の丘編 1997)に掲載されている。
 - 寛文度幕府案は、平面規模36尺四方(6尺間、6間四方)、組物二手先詰組、中備葺股、縁腰組挿肘木四手先、妻二重虹梁大瓶束である。
 - 川上前掲論文によれば、寛永21年(1644)造営の日御碕神社社殿の設計図「日御碕神社社殿建地割図」(日御碕神社所蔵 前掲『古図にみる日本の建築』所収)から、日御碕神社社殿と出雲大社の寛文度幕府案は、幕府作草方被官大工棟梁衆の関与、細部意匠、などの一致点が指摘できる。
 - 和田前掲論文。
付記 本稿は平成9年度文部省科学研究補助金(基礎研究C)の成果の一部である。

(1997年9月5日原稿受理、1997年11月14日採用決定)